

## 都市工學社主幹

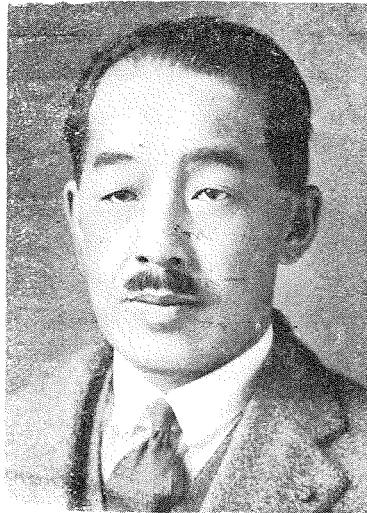
### 長江了一氏の逝去を惜む

長江了一がなくなられた。氏は土木雑誌『エンジニア』を發行して都市工學社の主幹で、最近その誌上に不健康をかこつて居られたが、とうとう、狭心症のために七月十八日、蕨窪の自宅で逝去されたのである。享年四十八であつた。

長江氏は岡山の人、大正二年に京都帝大土木科を卒業すると直に大阪の大林組に入社して請負業に従事することになつた。當時は所謂歐洲大戰景氣で、我國の事業界は黄金時代にあり、殊に造船業界は素晴らしい狂的進展振りを示してゐた。その頃大林組は、京濱間鶴見沿岸に於ける淺野造船所の建設工事を請負つて、長江氏は未だ少壯ではあつたが、其所へ大林組出張所主任として乗り出されたのであつた。

しかも其工事たるや造船界の好景氣に乗ぜんとする淺野翁一流の計畫によるものだから短期間の急速工事で、あらゆる方面の特長ある働手を集め、日夜數千の土工夫が宛然戰場の如く働いてゐたものである。しかも其土木工事だけでも數多の異色ある請負業者が入込んでの仕事だから、日夜肉弾相搏つと云つた様な葛藤の絶え間はなかつた。その間にあつて、長江氏は凡てを善處されたのである。

長江氏の壯心に、この現場の有様がどんなに印象づけられたかは分らない。氏はその後間もなく大林組を辭されて東京市道路局に入り、數年にして改良課長となられた。其後轉



じて復興局の材料試験所に入られた事を知りたが、間もなく辭めて終生の事業として都市工學社を興し、月刊技術雑誌『都市工學』を創刊された。のちに『都市工學』を廢して、現在の『エンジニア』を發行する様になつたが、雑誌發行の傍ら氏は武蔵高等工科學校の教授として、同校の行政委員にもなり、又道路研究會の爲にも盡力されてゐた。

何と云つても氏が一生の命を懸けたのは雑誌『エンジニア』であつたらう。『エンジニア』の經營に就ては、氏も随分苦心をされた様である。編輯に就ても眞似べからざる努力を拂はれてゐた。もともと、雑誌、殊に技術雑誌、その中でも土木雑誌の經營は容易な業ではない。

しかし、長江氏はこの困難な事業を十二年間も續けて來られた。その努力に對してはまことに敬虔の念を禁ずる能はざる處だ。今やしかしその氏は逝かれた。あの豪快な性格に接することも、その麗筆に見える途も、永遠に斷たれたのである。四十八歳と云へばこれからと云ふ處だ、天命とは云へ哀惜極つて寂れうの感限りなきものがある。たゞ願はくばその遺業の益々盛んならんことのみである。それに越した故人への手向けはないであらう。

因に長江氏の遺族は未亡人朝子氏と長男典彦、次男司郎、三男弘介の三氏がある。典彦氏は目下日本大學工學部土木科豫科に在つて亡父の業を繼ぐべく學業に勵んで居られる。